

情報社会の中でのバランスある 研究と教育を

都筑 幹夫

Tsuzuki Mikio

(東京薬科大学生命科学部)



今、社会は大きく動いている。情報は時々刻々と更新され、すぐに世界を駆け巡る。仲間の間では四六時中情報が行き来する。世界を見渡せば新興国が力を増し、経済も思想もグローバル化が進んでいる。その一方、世界各地で内戦や領土問題が生じ、世界経済の不安定さが語られる。こうした中、日本の若者は物質や情報の面では満たされ、国内で“ハングリー”という言葉を目にするのはほとんどない。多くの若者にとって、今必要としているものは心の充足なのかもしれない。就職難という言葉に不安を掻き立てられ、きつい表現に自信を失って、挑戦する気持ちより内向きの思考になっている。物質的豊かさの中で情報伝達の規模とその速さが人々の心をかき乱しているのかもしれない。

自然科学の研究成果も興味深く社会に報じられ、人々がそれに応答する。研究成果に対する人々の期待は大きい。とりわけ、医療や健康に関わる報道に関心が集まる。ライフサイエンスの基礎研究も医薬や治療法を中心に社会に直接結び付くことが期待される。研究費の多くは社会へ応用されそうなテーマに注がれる。それ自身は結構なことである。しかし、社会の人々が研究に関心を持つようになると、人に理解されにくい基礎研究は影に置かれ、研究者の意識も、自ずと社会が期待する研究に向いていく。研究者独自の知的好奇心を基にした、長期にわたって築き上げられるような研究テーマには、目が向けられなくなってしまふ。

ライフサイエンスの歴史を振り返ってみたい。生物の構造や機能を記述してきた“生物学”が発展し、遺伝子の本体であるDNAの構造が明らかになって、“ライフサイエンス”が“誕生”した。遺伝子の構造も明らかになり、遺伝子改変技術によって論理的な“科学”になった。その時、不可欠だったのがRIを用いた遺伝子解析技術である。その技術は蛍光を用いた方法に置き換えられた。そして、オミックスと呼ばれる網羅的研究やタンパク質などの機能高分子に着目した研究、遺伝子改変を用いた研究などへと研究の中心が移り、その成果が社会に応用され始めている。その一方で、RIを用いずとも生体分子を追跡することが可能になり、RIの利用頻度は減少した。

今、ライフサイエンスとその関連技術は急速に発展している。しかし、その基礎となる研究や技術を理解し、そこに新たな視点を切り開くことも忘れてはならない。RIを利用する人とその技術がなくなったら、原子レベルでのトレーサ技術は途絶え、放射線のこれまで蓄積された知識も社会から欠落してしまうことになる。社会の人々が研究成果に関心を持つことは素晴らしいことではあるが、研究者側はそれに振り回されては危険である。これから研究を担う若者は、これまで築き上げられてきた研究の基礎知識と技術をしっかりと会得し、自らの知的好奇心から新たな研究を積み上げていくことの重要性を学んでほしい。人々の興味も評価も研究の成果主義に偏りがちの今こそ、先端と基礎のバランスのとれた研究と教育が重要なのではなからうか。